

〈翻 訳〉

「若いアスリート⁽¹⁾のための権利の章典」の日本語訳

田 村 公 江

出典：ライナー・マーテンス（Reiner Martens, イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校）、ヴェルン・シーフェルト（Vern Seefeldt, ミシガン州立大学）〔編〕, 「健康、体育、レクリエーション、ダンスのためのアメリカ連盟（The American Alliance for Health, Physical Education, Recreation and Dance）⁽²⁾発行、1979年『子どものスポーツのためのガイドライン（Guidelines for Children's Sports）』, p.15-31（翻訳に関しては、現在の著作権者である「SHAPE America」から許可を得ました。）

I. 「若いアスリートのための権利の章典」を構成する10の権利

1. スポーツに参加する権利
2. 自分の成熟度と能力に釣り合ったレベルでスポーツに参加する権利
3. 適格性のある成人の指導者層を持つ権利
4. 成人としてではなく子どもとしてプレイする権利
5. スポーツに参加する際、指導方針や意思決定に参画する権利
6. 安全で健康的な環境においてスポーツに参加する権利
7. スポーツに参加するために適切な準備をする権利
8. 成功を目指して努力する機会を等しく持つ権利
9. 尊厳をもって扱われる権利
10. スポーツを楽しむ権利

II. 各権利の解説

1. スポーツに参加する権利

子どもたち全員にチャンスを与えること

スポーツに参加する権利を子どもたちに拒否する人などいるのでしょうか。じつは、いるのです。子どもたちのスポーツプログラムが、高校対抗やカレッジ対抗、あるいはプロスポーツのモデルに基づいている場合、そのようなモデルにおいては

最優秀者しか試合に出られないので、大人たちは、すべての子どもが持っているはずの「スポーツに参加する権利」を拒否してしまうのです。技能の劣る子どもをチームから「切り離し」たり、才能のある子どもにプログラムの資源を不釣り合いなほど多く与えたりして、才能のある子どもにだけスポーツプログラムを提供するコミュニティが、いまだに多すぎます。こういうモデルを採用すると、どうしても、たくさんの平均的な子どもや不器用な子どもから、スポーツに参加する機会を奪うことになります。しかし、才能のある子どもと同じように、平均的な子どもや不器用な子どもも、スポーツ参加の利益に与る機会を持つべきです。地域のスポーツ機関は（学校も学校でない団体も含めて）、彼らの資源が許す範囲で最大限に多様なプログラムを提供しようと努めなければなりません。

選択する権利

子どもが皆スポーツに参加することを選択するとは限りませんが、子どもは皆、スポーツに参加する権利を持っています。もちろん、すべての子どもが、彼らが選んだチームでプレイできるとは限りませんし、彼らが望む条件そのままプレイできるとも限りません。しかし、参加する機会とは、性別、人種、能力レベルに関係なく、すべての子どもに開かれているべきです。

強制ではなくガイダンスが必要

参加する権利には、参加しない権利も含まれています。両親が子どもにスポーツをさせたい場合、スポーツの手ほどきをすることによって、あるいは、子どものスポーツプログラムでボランティアリーダーを務めることによって、スポーツに参加するよう子どもたちを励ますというやり方をすべきです。子どもたちが、スポーツをするように強制されたり脅されたりすることは、あってはなりません。両親は、このようなやり方と適切なガイダンスを混同してはならないのです。子どもたちは強制や脅しを嫌がるものですし、プレイするよう強いられたときには、めったにスポーツに幸福を見出しません。

過度な専門化はよくない

参加する権利には、色々な種目やポジションでプレイする機会が与えられることも含まれています。早すぎる年齢での過度な専門化は、多種目を学ぶ機会や、どの種目が自分にもっとも気に入るかを決める機会を子どもたちから奪ってしまいます。

競技の強度

子どもたちはまた、しかるべき限度内で、スポーツに熱中する強度を決定する権利も持っています。高度に競技的なスポーツをする準備ができている、つまり、そのレベルまで成長している子どももいます。しかし、それほど競技的でないスポーツプログラムの方が好きという子どももいるのです。

フルに参加する権利

参加する権利には、フルに参加する権利も含まれています。これは、すべての子どもは、しかるべき限度内で、競技に参加する等しい権利を持つべきである、ということを意味しています。もちろん、すべての子どもが、あらゆる試合に出っぱなし、ということなどできません。しかし大人たちは、すべての子どもが、その子にとって最良であることに基づいてプレイできるようにするべきであって、試合に勝てそうな起用の仕方をしては

ならないのです。

子どもが第一、勝利は第二

大人は子どもに、競技に勝つ見込みを高めそんなことではなく、各々の子どもにとって最良であることに基づいてプレイすることを許すべきです。勝利が子どもよりも重要なものとなるとき、フルに参加することが陰険な仕方で拒否されるようになります。そういったことの例の一つは、野球の試合中に、ある子どもに向かって、打撃が下手で、空振り三振しそうだからという理由で、「散歩してこい」と何度も言うことです。スキルの劣る子どもにプレイさせたら、つまり、「散歩に行く」のではなく「思い切り打つ」のを許したら、まったくのところ、時には勝利を危うくするかもしれません。しかし、もし大人が「子どもが第一、勝利は第二」という哲学を実践するなら、子どもは、プレイする機会を持たなければならないのです。「表1」⁽⁹⁾に列挙されている子どものスポーツの目標に関して言うと、ベンチで座っているだけでは、それらの目標はほとんど達成されません。達成されるものがあるとしたら忍耐ぐらいのものです。しかも、そういった経験には刺が付きものです。

ベンチに座ったまま勝つより、プレイできて敗ける方がいい

プレイさせてもらえないとき、スポーツを辞めてしまう子どももいます。そういう子どものことを誰が非難できるでしょう。子どもたちはそういう仕方で、勝つことよりも参加する権利の方が大切だということを、大人たちにはっきりと示しているのです。「勝てるチームに所属、ただしベンチに座ったまま」がいいか「負けそうなチームに所属、ただし規則的にプレイできる」がいいか、どちらを好むか子どもたちに尋ねたところ、90%近くの子どもが、負けてもいいからプレイすることを選ぶと答えることを、いくつもの研究が報告してきました。そのメッセージは明白です。子どもたちは参加する権利を欲しているのです。

2. 自分の成熟度と能力に釣り合ったレベルでスポーツに参加する権利

子どもたちを年齢だけでグループにすることの何が間違っているのか？

スポーツをする子どもたちは、一般に、年齢に従って、異なる競技レベルにクラス分けされます。そして幾つかのケースにおいては（たとえばレスリングやフットボール）、年齢と体重とでクラス分けされます。しかし、年齢と（時には）体重だけを基準にして子どもたちをクラス分けすると、成熟の遅い子どもたちが、自分の成熟度に釣り合ったレベルで参加する権利を拒まれてしまうのです。

子どもたちの生物学的時計は異なる速度で進む

年代的には同年齢であっても、子どもたちの身体的成熟度は実に様々です。そして、競技のためにクラス分けされる年齢範囲が広くなればなるほど、これらの多様性も広がります。子どもたちの生物学的時計は年代的時計と並行して進むとは限りません。たとえば、年代的に12歳の子どもたちの間に、身体的成熟度において5歳もの違いがあったり、90ポンド（約40キロ）の体重と15インチ（約38センチ）の身長の違いがあったりするかもしれないのです。こういった違いがあることは、早熟タイプの子どものために有利に働きます。

子どもたちは心理的成熟度においても多様である

競技の厳しさへの好みに影響を及ぼす心理的成熟度においても、子どもたちは多様です。高度に競技的なプログラムで競い合うか、あるいはまったく競い合わないかという、二つの選択肢しか子どもたちに提供しないスポーツ団体が多すぎます。高度に競技的なスポーツプログラムでプレイすることを好む子どもたちもいますが、それほど競技的でないスポーツの方が好きな子どもたちもいるのです。成熟度に釣り合ったレベルでスポーツに参加する権利を、大人たちが子どもたちに認めて実現するためには、子どもから若者まで、どの年齢層の子どもにも、厳しさの度合いが様々な競技プログラムを提供する必要があるでしょう。

能力における多様性

似たような身体的、心理的成熟度であっても、能力の実質的な度合いは多様です。年齢のわりに際立って器用な子どももいますが、ひどく不器用な子どももいるのです。成熟度と能力において大幅に異なっている子どもたちが一緒に競い合うとき、晩熟タイプの子どものスキルが乏しい子どもたちは失敗を運命づけられ、しばしば笑いものにされるばかりか、身体的健康を危険にさらすことにもなります。

子どもたちにマッチしたスポーツを

「スポーツに参加する権利」を実現するためには多様なスポーツプログラムを提供しなければなりません。それは小さなコミュニティにとっては特に、簡単な仕事ではありません。しかし、できることはもっとあるはずです。たとえば、スポーツ種目をもう少し増やせば、子どもたちは、自分の身長、体重、成熟度、能力に関して望ましいスポーツ種目に出会い、自分にマッチしたスポーツをすることができます。同様に、一つの種目において多様なレベルの競技を提供すれば、子どもたちは、より均一にグループ分けされ得ます。実際、一つのプログラムの中にもっと色々な競技レベルを提供しさえすれば、子どもたちは、彼らの能力と成熟度に合ったレベルでプレイすることを選ぼうとするでしょう。

成熟マッチングの方法

子どもとスポーツのマッチングの改善は、各レベル内の年齢幅を小さくすることによって、身長、体重、年代的年齢を組み合わせることによって、そしてグループ分けのための能力テストを使用することによって達成され得ます。また、成熟度と能力の違いに応じた競技レベルに子どもたちを移動させる柔軟性をリーグ管理者が持つことも、マッチングの改善には欠かせません。これらの方法は、勝つことがプログラムの第一目標である場合には物議をかもしうかもしれません。しかし、「子どもが第一、勝利は第二」という哲学を誠実に実践するプログラムにおいては、そうはならないでしょう。

3. 適格性のある成人の指導者層を持つ権利

適格性のある指導者層に代わるものはない

適格性のある成人の指導者は、若いアスリートたちから彼らの「権利の章典」を奪うものに対抗する最善の備えです。適格性のある成人の指導者は、スキルを習得する喜びを経験できるように、困難なゴールを追究する喜びを知ることができるように、敗北の中に成功があると理解できるように、子どもたちに助けます。それに対して、適格性のない成人の指導者は、熱意を抑え込み、無能だという感覚を作り出し、参加することに本来備わっている喜びを弱めることによって、子どもにとってスポーツが持つ潜在的な有益性を損なってしまう。

適格性のある指導者の役割はかんたんなものではありません。適格性のある指導者は、特定のスポーツ種目の基礎的なスキルや戦略についての理解を持っているだけでなく、子どもについての理解も持っていないかぎりならぬのです。すべての子どもが能動的に振る舞い、学ぶ機会を持てるような効果的な練習を組織したり運営したりするだけでなく、子どもの楽しみや学習意欲を損なわないように、それをしなければなりません。適格性のある（スポーツプログラムの）職員は、ルールの実行について知識があり公正であるだけでなく、それらを重視することを子どもの心にしみ込ませるような働きかけをしなければなりません。

良い指導者の資質

子どものスポーツにおける成功した指導は、指導の基盤を、スポーツに対する子どものニーズや熱意を理解することに置いています。成功した指導者は、アスリートに共感する能力や、積極的かつ効果的にアスリートと意思疎通する能力を持っています。成功した指導者は、子どもたちが潜在能力をスポーツの「中で」獲得できるように助けるだけでなく、スポーツが「持つ」潜在的な有益性を獲得できるように助けなければなりません。良い指導者は、権力に関して気前がよく、若いアスリートに権力を分かち与えます。適格性のある成人の指導者にとって、子どもの承認を獲得するために子どもを虐待する必要などないのです。

勝つことは指導の質を反映するが

卓越したアスリートが卓越したコーチである、あるいはコーチの勝敗記録がコーチの指導力の当てになる尺度であると仮定するのは、間違っています。子どものスポーツにおいては、勝つことは「副次的産物」であって、成功した指導を示す基準ではありません。成功した指導は、「表1」に述べられている諸目標を若いアスリートがどれくらい幅広く達成するかを決定することによって、より良く評価されます。

4. 成人としてではなく子どもとしてプレイする権利

成功へのチャンス

スポーツの効能の一つは、困難な、しかし価値あるゴールに到達するために、卓越性を求めて努力しようという気持ちにさせることです。しかし、年齢を超える卓越性でプレイすることを期待されると、子どもたちは挫折感を覚え、意気阻喪してしまいます。自分で選択することができるなら、子どもたちは自然にスポーツ活動をやり続けるでしょうし、その中で、こうすれば成功できるという感覚を持つものです。

子どもは大人ではない

コーチや両親は、しばしば、若いアスリートを成熟した大人のように扱い、素早く学び、器用にプレイすることを期待します。それどころか、子どもには自分よりもうまくなってほしいと願う大人もいるのです。そういう非現実的な期待は、子どものスポーツにおける不幸の主な源泉です。

非現実的な期待をしてはならない

大人の中には、子どもたちがどういう風にプレイすべきかについて非現実的な期待を持つばかりか、子どもたちが彼らと同じくらい真剣にスポーツに取り組むことを期待する人がいます。子どもたちは練習中や試合中に、笑ったり、「ふざけまわったり」してはいけないと言われます。楽しみは勝利の中に見出すべきであり、勝利の追及に見出すものではないというわけです。子どもたちはまた、コーチから、対戦相手は敵なのだから、親し

げにしないようにとさえ言われます。

大人の中には、子どもたちに大人並みの自制心で感情を制御することを期待する人もいます。勝利の時に喜びを抑制し、敗北の時に悲しみを隠すべきだということです。うまくできなくても怒りを見せてはならないし、うまくいったからといって得意顔をしてはならない。しかも、大人たちが子どもっぽい感情を示したとき、子どもたちは、寛容で物分りがよいことを期待されるのです！

スポーツはいつも楽しく

子どもたちが大人の監督なしにスポーツをするとき、何時間もぶっ通しにスキルの反復練習をしたり、一つのポジションに自分を縛りつけたり、喜びや悲しみの感情を隠したりといったことをしません。これらは、大人がスポーツをするときのやり方です。自分たちのやり方でやらせてもらえたら、子どもたちは手持ちのスキルでスポーツをして、プレイしながらスキルを向上させていきます。子どもたちは、一つのポジションに飽きたら別のポジションに移り、お気に入りのポジションでプレイする権利を取り合ったりしながら、たくさんのポジションでプレイするでしょう。子どもたちは、真面目と不真面目の驚くべき混合でもってプレイするのです。

バランスを取る

とはいえ、大人の指導が子どもたちから歓迎されることもあります。子どもたちは、気を配ってもらうことや、ユニフォームの立派さや、スキルを修得することの満足感が大好きです。しかし、過度に組織された練習、スキルの過度な専門性、スポーツに対する真剣さの過度な強調は、明らかに歓迎されません。子どもたちは、何人かの大人が決めたやり方ではなく、子どもたちのやり方でスポーツを楽しんでよいのです。

5. スポーツに参加する際、指導方針や意思決定に参画する権利

独立心を育てる

子どもたちと指導方針や意思決定を分かち合うことは、スポーツの恩恵を分かち合うことです。

成長途上にある子どもたちは、自ら関わっているという感覚や、自分自身が自分に起こっていることの重要部分であるという感覚を持つ必要があります。子どもたちと、彼ら自身の運命を決定する機会を分かち合うことはこういった感情を育てますし、独立心の発達を促進します。

子どもたちにチョイスを与える

指導方針と意思決定を子どもと分かち合うことは、スポーツをするかしないかの選択を子どもに与えることによって始まります。もし彼らがスポーツをするかを選んだら、どの種目にするか、またどういう競技レベルでスポーツするかについて、幾つかの選択肢が与えられるべきです。子どもたちは、個人として、そしてチームのメンバーとして、スポーツ活動のゴールを設定するに際して、決定権を持っているべきです。子どもたちはまた、練習方法や競技の運営に関して、コーチたちと意見を分かち合えるようになっているべきです。

分かち合うとはどういうことか

この権利を子どもたちに認めることは、子どもたちの願いがみんな聞き入れられるべきだということの意味しているわけではありません。また、コーチたち、リーグ管理者たち、そして両親が、彼らの指導者責任を放棄すべきだということの意味しているのではありません。

むしろ、大人たちが若いアスリートたちと責任を、一人ひとりの子どもの成熟度に比例して「分かち合う」ということを意味しています。

責任を放棄するのではない

指導方針と意思決定を子どもたちと分かち合うことは、どんな決定をする際にも子どもたち全員に投票させなければならない、ということの意味しているのではありません。ほとんどのスポーツにおいて、決定には迅速さが要求されるものです。子どもたち全員が、自分のやり方でそういう決定ができるわけではありません。子どもたちのスポーツプログラムは、参加民主主義のように効率よく運営されるものではありません。子どもた

ちのスポーツプログラムは、構成員の助言を求め、それを実行する情け深い独裁者がいる時、最良の仕方機能します。子どものスポーツは民主主義を教えるものではないとはいえ、専制政治を教える必要ありません。明らかに、大人たちが運営の任務を負うべきです。つまり、大人たちには責任があるのです。子どもたちは権威へのリスクを学び、指示に従い、義務に応じる必要があります。しかし、子どもたちはこれらのことを、彼らが統治に発言権を持つときに、もっとも良く学ぶのです。

分かち合うことの価値

指導方針と意思決定のプロセスを分かち合う機会を与えられると、子どもたちは、グループにより深く関わることを習得します。チームに参加することには、コーチやチームメートと協力することや、チームの目標に向けて精一杯の努力をすることが含まれていることを、子どもたちは学ぶのです。子どもたちは、自分の権利が及ぶのは、他人の権利を侵害しないところまでだということも学びます。

聞くことも重要！

指導方針と意思決定を子どもたちと分かち合うことは、双方向コミュニケーションを要求します。大人たちは、子どもたちに何をすべきかをいつも言っていますが、むしろ、子どもたちの声に耳を傾ける必要があるのです。子どもたちは、受容してもらえ環境で意見を述べる機会を歓迎します。そして、お返しに、大人の助言に対しても、より受容的になるのです。スポーツとの関わり方を管理する決定に子どもが参加する権利を拒否したら、子どもたちのニーズが読み取られないままになります。そうすると、独創性は窒息させられ、プログラムはうまくいかず、リーダーシップと意思決定に関する潜在能力は発達しないままとなります。リーダーシップのスキルを学ぶためには、子どもたちは決定する機会を持たなければならないのです。

6. 安全で健康的な環境においてスポーツに参加する権利

指導者層が鍵

安全な備品、安全な設備、安全な活動は、明らかに、この権利を保障するためにもっとも重要です。しかし、しばしば、年齢の低い子どもやスキルが劣る子どもたちは、原っぱやひどく破損した体育館に追いやられ、スキルの高い子どもたちから突き返されたフィットしない、安全でない備品を与えられます。スポーツ環境の安全性を保証するために最大限の管理を必要とする子どもたちが、最低の適格性しか備えていない大人にコーチされていることが、実に頻繁にみられます。その結果、アメフトにおいて、ブロックしたりタックルしたりする際の安全でない方法を教えられてしまいます。また、レスリングにおいて、過度の減量を促されます。さらに、コーチが子どもの頭めがけてボールを投げてもバッターボックスに立ち続けることを強制するような仕方では、野球のボールを恐れないことを教えられるのです。

明白なことですが、安全で健康的な環境でスポーツに参加する権利を保障する上で最も重要な要素は、良い指導者層です。

安全を保障する

安全性を欠くコンディションや練習に気づき、それを正すのに十分な知識を持っているコーチが、子どものスポーツのすべてのレベルにおいて必要とされています。そういうコーチは、怪我を「防止する」ことを重視しますが、それだけでなく、子どもが怪我をしたら適切な応急処置を提供することもできます。そういうコーチは、子どもたちの発達レベルにスポーツが要求することを適合させるために、ルールを柔軟に変更します。そして、スキルを少しずつ教えていき、より複雑な動きは、基礎をマスターしてしまってからしか試しません。

誇張された怪我のリスク

大衆紙はこれまでに何度も、子どものスポーツにおいては怪我のリスクが高いとほのめかしてきました。その結果、多くの親たちが、子どもがス

スポーツに参加するとき、安全性のことを心配します。しかし、子どもたちのスポーツは、私たちがしばしば思い込まされているよりもずっと安全なのだということを、エビデンスは示しています。もちろん、子どもたちは、スポーツにおいて、走ったり、倒れたり、互いにぶつかりあったりするとき、怪我をすることがあります。しかし、子どものスポーツの指導者の大部分が信じていることですが、子どもたちが適切に監督されているならば、怪我のリスクは大人の監督なしにプレイする時よりもずっと少ないもののなのです。

彼らにプレイさせよう、ただし安全に

スポーツで怪我をする潜在的なリスクに過剰反応をしてしまうと、子どもたちを保護の繭の中に置くことになってしまいます。大人は、怪我を恐れるあまり子どもたちにスポーツをプレイする権利を拒むよりも、スポーツ環境がしかるべき仕方です。

7. スポーツに参加するために適切な準備をする権利

子どもたちに何が期待されているのかを告げる

スポーツに参加するための適切な準備には心身両面のレディネスが含まれます。適切な準備は、子どもが参加しようとしている種目のプログラムの目標と指導について、正確な情報を子どもに提供することによって始まります。子どもは、自分に何が期待されることになるかを知る権利を持っています。また同様に、自分の努力から何を期待できるかを知る権利も持っているのです。

コンディショニングを整えることとスキル

スポーツに向けて子どもを準備させるためにまず必要なのは、その競技レベルでスポーツに参加することが身体的に可能であることを示す医療許可です。コーチは二重の責任を負っています。個々のスポーツが要求することができるように若いアスリートのコンディショニングを適切に整えることと、そして、安全にプレイをするために必要な最低限のスキルを教えることです。

メンタル面の準備

しかし、子どもたちは競技に向けて身体的に準備される必要があるだけでなく、メンタル面においても準備される必要があります。ルールや競技のプロトコルや一般に認められた行動規範を十分に理解する前に競技へと追い込まれる場合、子どもたちはメンタル面の適切な準備が欠けているのです。

現実的なゴールを設定するように助ける

メンタル面において準備されることは、「現実的なゴール」を設定する助けにもなります。

子どもたちの中には、うまくなろうと努力することに伴う満足感を実感できるところまで自分を試したことがないため、あまりにも小さな抱負しか持たない子どもがいます。あるいは逆に、あまりにも大きな抱負を持つ子どももいます。そういう子どもは、自分で設定したゴールに到達することができず、精一杯努力しても決して満足することができません。

適切な準備をする権利は、子どもたちが怪我や病気のために活動できなかった後にも適用されます。深刻な怪我の後、アスリートは十分なりハビリ、医療許可、競技に安全に復帰するための十分な身体的コンディショニングをした後でしか競技に戻ってはなりません。

親の責任

適切な準備のための責任は主としてコーチが負っていますが、親もまた、子どもたちに適切な飲食と睡眠を保証し、子どもたちがスポーツのルールとプロトコルを確実に理解できるようにすることによって重要な役割を果たします。親はまた、形式張らない仕方です子どもと遊ぶことによって、スポーツの基礎的なスキルが発達するように促すこともできるのです。おそらく親はコーチよりもずっと、子どもがプレイについて現実的な期待を形づくることを助けることができるでしょう。(子どもたちが両親の非現実的な抱負を持たされてしまうとしたら、不幸なことです。)

アスリートの義務

もちろん、若いアスリートは、安全で楽しいスポーツ参加のために自ら準備する義務を負っていないわけではありません。子どもたちは自分の身体コンディションを整え、基礎的なスキルを学ぶために精一杯努力しなければなりません。さらに、進んで指示に従い、大人によって組織されたスポーツに参加することに伴う約束事を進んで守らなければなりません。

両親とコーチはもちろん、子どもたちにこれらの義務を伝える責任を負っています。

適切な準備をするとスポーツはもっと楽しくなる

子どもたちが十分に準備されているとき、身体的あるいは心理的に傷を受ける機会は減少します。適切に準備されていたら、子どもたちは、スポーツ参加の有益性を余すところなく獲得する機会を、もっと多く持つでしょう。

8. 成功を目指して努力する機会を等しく持つ権利

勝つことと成功は同じではない

子どもたちはスポーツにおいて成功する権利を持っているわけではありません。それは、(権利として保障されていることではなく)勝ち取られるべきもののなのです。子どもたちが等しく持っているのは、成功を目指して努力する機会を持つ権利です。子どもたちは、成功は勝利の同義語ではないこと、敗北は失敗の同義語ではないことを教えられなければなりません。大人の中にもこういうことを教えられなければならない人がいます。子どもたちは、成功を、潜在能力を発展させることに向けてのプロセスとして見るように助けられなければなりません。子どもたちは、成功とは、行いの中、すなわち、なされた努力とともにある満足感の中に見いだされるのであって、競技の結果の中に見いだされるのではない、ということを学ぶ必要があります。

成功を目指して努力する権利を拒絶すること

子どもたちが等しく持っているはずの成功を目指して努力する権利が拒絶されるのは、次のよう

な場合です。すなわち、指導をわずかし、あるいはまったく与えられないとき、建設的なコーチの代わりにあら探しされるとき、スキルの練習をしたり、練習したスキルを試合でやってみたりする機会がわずかし、与えられないとき、持ち合わせているスキルのレベルに対して上級すぎる競技に追い立てられるときです。すべての子どもはユニークな潜在能力を持っています。そして、それぞれの潜在能力を自分なりに発展させる機会を与えられるべきです。成功を目指して努力する機会が等しく与えられることは、大人たちが、子どもをスポーツに、そしてスポーツを子どもに適合させるときにのみ実現可能です。

サクセスフルであること

子どもたちはまた、勝つことと負けることではなく成功と失敗が、彼ら自身の値打ちの反映であることを学ばなければなりません。すべての子どもがスポーツにおいて勝てるわけではなく、実際、絶えず勝つ人はほとんどいません。しかし、成功というものが自分の潜在能力の発展に向けての努力とみなされるなら、すべての子どもが成功できるのです。

成功の価値とは

子どもの興味をスポーツに引き付けるために本質的なのは、勝つことではなく、成功です。

勝つことは短期目標としては適切です。しかし、成功は、スポーツに参加する動機づけを長期的に作り出します。成功は成功への欲望を育て、自信を作り出し、能動的な自己理解を育むのです。スポーツにおいて成功を目指して努力する権利を子どもに拒絶することは、スポーツの主要な有益性を拒絶することです。

9. 尊厳をもって扱われる権利

子どもたちをリスペクトすること

人間の尊厳には年齢制限などありません。子どもたちは、大人たちがそうであるのとまったく同じく、個人的感情を尊重されたいと思っています。子どもたちは、スポーツに参加するとき、スポーツとは別の活動に取り組むときとまったく同

じく、尊厳をもって扱われたいと願っているのです。しかし、何人かの大人の振る舞いを見ると、子どもたちを細やかな感情と共感をもって扱う必要はないと考えていることがわかります。

この権利を拒絶するのはどういうときか

尊厳をもって扱われるという子どもの権利は、親が子どものプレイについて軽蔑的な批評を叫ぶとき、恐怖心を示したり、怪我を報告したりしたことをとがめて、コーチが子どもを威圧するとき、スポーツを辞める子どもに大人が恥をかかせるときに、拒絶されます。子どものスポーツには、子どもたちを怖気づかせようとして叱るやじり屋や、若いアスリートの自尊心を自分のエゴを満たすために貪り食う無神経な大人や、激しい練習をすればするほどプレイが上手くなると子どもたちを脅す大人の居場所はありません。

スポーツを通して、大人たちは、子どもたちが自尊心を形成することを助けるべきであって、それを壊そうとしてはいけないのです。

チームメートによる脅し

しかしながら、大人たちは、スポーツにおいて子どもに恥をかかせる唯一のグループではありません。しばしば、もっとも心を打ちのめす攻撃は仲間から来ます。子どもたちに、チームメートや対戦相手をバカにしたり脅したりすることを許しておくような大人たちは、彼ら自身がそういう無礼をはたらいているのと同じくらい罪深いのです。たとえば、一人の子どもを、チームあげてのあざ笑いや陰險なユーモアの的となる「まぬけ君」にするという罪を、コーチたちとチームメートが犯していることがしばしば見受けられます。「まぬけ君」がその役割に由来する注目を楽しんでいるようにみえたとしても、彼あるいは彼女は、そんなことのために自尊心を犠牲にしなければならないのです。大人たちは、一人の子どもにも、そんな犠牲を払わせることを許しては（あるいは強制しては）いけません。

尊厳を保護する

確かに、ときには、子どもたちは罰される必要

があるかもしれません。しかし、罰は、子どもの尊厳を損なうことなく与えることができます。スポーツを通して子どもの尊厳を形成し保護することは、子どもたちが、望ましく現実的な健全なアイデンティティの感覚を発展させることを助けます。健全なアイデンティティの感覚は好ましいものであり、また現実的なものです。

10. スポーツを楽しむ権利

楽しく「やった！」になること

スポーツを楽しむ権利は自明のことです。なぜなら、楽しさはスポーツ活動のエッセンスだからです。ここまで述べてきた9つの権利が若いアスリートに保証されているとき、楽しむ権利もまた保証されています。これらの権利のどれか一つでも拒絶されるとき、子どもたちは非難されることなくスポーツ参加を辞める権利、そして、別のところでこれらの権利を求める権利を持っています。

権利には責任が伴う。

条件を満たすこと

権利には責任がつきものです。若いアスリートは、スポーツ参加には一定の義務が付いてくることを理解しなければなりません。スポーツ参加の有益性を獲得したいなら、若いアスリートは、練習や試合に時間通りに来ることや、コーチやチームメイトと協力する責任があります。子どもたちは、大人はパーフェクトではないこと、自分たちもまたパーフェクトではないことを認めなければなりません。つまり、子どもたちは、大人たちが子どもたちに忍耐強くあらねばならないのとまったく同じように、大人たちに思いやりと忍耐を持つことが義務づけられるのです。若いアスリートは自分の振る舞いに責任を持ち、自分の行為の結果を喜んで引き受けなければなりません。もっとも重要なことは、子どもたちは他の子どもの権利を保護しリスペクトする義務を持っているということです。

【訳注】

(1)「若いアスリート」とは、大人が運営するスポー

ツプログラムでプレイする13歳以下の子ども（場合によっては14歳以上の子どもも含む）を指している（冊子『子どものスポーツのためのガイドライン』p.8）。アメリカの学校制度では11歳から13歳が中学生であり、14歳から17歳が高校生である。アメリカにおいて13歳以下の子どもとは、具体的に言うところ小学生と中学生のことである。

なお、日本の学校制度では、13歳から15歳が中学生、16歳から18歳が高校性である。

(2) The American Alliance for Health, Physical Education, Recreation and Dance (略称 AAHPERD) は現在、「シェイプ・アメリカ (SHAPE America Society of Health and Physical Educators)」という名称になっている。「若いアスリートのための権利の章典」は、冊子『子どものスポーツのためのガイドライン』に掲載されている。同冊子は、安全で楽しめる条件のもとで、子どものスポーツ参加を最大限に促進するという意図のもとに作られた。目次は下記のとおり。

- ・「小学校児童のための望ましい競技」特別委員会の委員名簿
- ・前書き
- ・序文
- ・子どものスポーツプログラムの目標（「表1」）
- ・若いアスリートのための権利の章典
- ・子どものスポーツにおける主な論点
- ・注釈付き参考文献一覧

(3) 冊子『子どものスポーツのためのガイドライン』、p.11に掲載されている「子どものスポーツプログラムの目標」のこと。20個の目標が挙げられている。

1. 運動能力を発達させる。
2. 体力を発達させる。
3. 子どもたちに、どのように協力するかを教える。
4. 積極的な自己概念につながる達成感を発達させる。
5. 後々まで続くスポーツ参加への関心と意欲を発達させる。
6. 健康で強いアイデンティティを発達させる。
7. 頼り頼られる活動を通して独立心を発達させる。
8. 社会の価値を増進し担う。
9. 道徳的成長を促す。
10. 楽しみを持つ。
11. 社会的能力を発達させる。
12. 家族と一緒に過ごすことを促進する。
13. 身体的・感情的な学びのための機会を提供する。ここには、感情、イマジネーション、身体がなしうることへの評価を理解し表現することを学ぶことが含まれる。
14. スピード、強さ、持久力、バランス、柔軟性、機敏さを発達させる。
15. リーダーシップのスキルを発達させる。
16. 決定を下すことと責任を引き受けることを学び、それによって自己信頼、情緒的安定を発達させる。
17. スポーツマンシップを教える。
18. イニシアティヴを発達させる。
19. 子どもにどのように競い合うかを教える。
20. 他者との比較を通して自分の能力について学べるように、子どもたちを助ける。